

『平家物語』における和歌一覧（巻七～巻十二）

高橋亜紀子・高村圭子・田村睦美

2012年度、青山学院大学大学院での櫻井陽子先生（駒澤大学教授）によるゼミ「中世文学演習（1）」において、『平家物語』作中の和歌の諸本比較が行われた。大変興味深いテーマであったためゼミ終了後も有志による研究が続けられ、先日、廣木一人教授退職記念論集『日本詩歌への新視点』（風間書房、2017）においてその一部を公表した。しかし紙幅の関係もあって、前半部（巻一～巻六）しか発表できなかったことが心残りであった。

本稿では、その際に掲載がかなわなかった後半部（巻七～巻十二）を改めて収録した。『新編国歌大観 第五巻 歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編 歌集』（1987、以下『新編国歌大観』と記す）に所載された『平家物語』（覚一本・八坂系本・延慶本・長門本・源平盛衰記）の和歌を中心に、屋代本・四部合戦状本・源平闘諍録・南都本・南都異本も付して巻別にまとめた。『新編国歌大観』は漢詩や今様の収録が不完全なため取り上げていないが、出典や異同に関しては、できる限り収録するよう心がけている。

底本・凡例は基本的に前掲の論集と同じである。後半のみの掲載という中途半端な形の上、不足・不備も少なくないと思うが、ともあれこれで全体を公表することができた。つたない研究成果ではあるものの、後学の一助になることを切に願うものである。

●底本

通し番号は『新編国歌大観』による。表を作成する上で参照した『平家物語』底本は下記の通り。

覚一本…『日本古典文学大系 平家物語』（岩波書店）

中院本（八坂系）…『中世の文学 中院本平家物語』（三弥井書店）

国民文庫本（八坂系）…『平家物語 附 承久記』（国民文庫）

延慶本…『延慶本平家物語全注釈』（勉誠出版）

長門本…『長門本平家物語』（勉誠社）

源平盛衰記…『源平盛衰記慶長古活字版』影印版（勉誠社）

『中世の文学 源平盛衰記』（三弥井書店）

屋代本…『屋代本高野本対照平家物語』（新典社）

南都本・南都異本…『南都本・南都異本平家物語』影印版（汲古書院）

※ 南都本は高橋伸幸による翻刻（札幌大学短大部紀要）も適宜参照した。

四部合戦状本…『四部合戦状本平家物語』（斯道文庫）

※ 高山利弘による『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂出版）も適宜参照した。

源平闘諍録…『源平闘諍録と研究』（未刊国文資料刊行会）

● 凡例

・『新編国歌大観』において、語り本系では覚一本（1～107）と八坂系独自歌（108～117）、読み本系では延慶本（1～247）と長門本独自歌（248～296）、および盛衰記（1～271）が収録されている。全歌に通し番号がついているのは覚一本・延慶本・盛衰記の三本である。今回は巻七～巻十二の歌について、覚一本は全歌、他は紙面の関係から独自歌のみ取り上げた。

・表中の諸本名は以下の略号（〈覚〉…覚一本、〈屋〉…屋代本、〈八〉…中院本、国民文庫本、〈延〉…延慶本、〈長〉…長門本、〈盛〉…源平盛衰記、〈四〉…四部合戦状本、〈闘〉…源平闘諍録、〈南〉…南都本、〈南異〉…南都異本）で示した。

それに続く漢数字は巻数を示す。アラビア数字は『新編国歌大観』の番号である。

（例）覚二 8…覚一本巻第二・通し番号八番目

- ・今様、漢詩、引歌は取り上げなかった。
 - ・八坂系において、八坂系一類本中院本を底本とし、必要がある場合は、八坂系二類本国民文庫本（城方本）を参照した。
 - ・初句は覚一本・延慶本・その他として示した。
 - ・表には詠者・出典・備考を付記し、語句の異同については備考で触れた。また、備考において第一句は(1)、第二句は(2)というように表記した。
 - ・四部本は、本来、歌がある部分が1行空白となっている場合は「欠」とした。
 - ・出典の表記例は、題名・番号・作者名の順に記した。
- （例）千載和歌集・百番・俊成 → 「千載・100（アラビア数字）・藤原俊成」と表記。
- ・和歌の表記は『新編国歌大観』に従うものとした。
 - ・一覧表は巻末に掲載した。また紙幅の関係上、枠内に収まらない記事は欄外に記した。

諸本独自歌一覧

・基準となる覚一本は『新編国歌大観』より全歌（巻七～巻十二）掲載し、それ以外は他本と重複しないもののみ掲載した。

・長門本・盛衰記における（ ）内の数字は、覚一本に相当する巻数である。前回は独自の通し番号を併記したが、今回は『新編国歌大観』番号のみとした。

（例）覚十一 92 …覚一本巻第十一・『新編国歌大観』番号 92

（例）盛（七）151 …盛衰記で覚一本の巻第七に相当・『新編国歌大観』番号 151

・『新編国歌大観』にない四部本・南都本・關靜録の独自歌は、それぞれ底本を参照した。

覚七 56 千はやぶる神にいのりのかなへばやしくも色のあらはれにける

覚七 57 たひらかに花さくやども年ふれば西へかたぶく月とこそなれ

覚七 58 いかにせん藤のすゑ葉のかれゆくをただ春の日にまかせてやみん

覚七 59 さざなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

覚七 60 あかずしてわかるる君が名残をばのちのかたみにつつみてぞおく

覚七 61 くれ竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬみやの中かな

覚七 62 あはれなり老木わか木の山ざくらおくれさきだち花はのこらじ

覚七 63 旅ごろも夜な夜な袖をかたしきておもへばわれはとほくゆきなん

覚七 64 はかなしなぬしは雲井にわかるれば跡はけぶりとなちのぼるかな

覚七 65 ふるさとをやけ野の原にかへりみてすゑもけぶりのなみちをぞ行く

覚八 66 一声はおもひ出でてなけほととぎすおいその森の夜半のむかしを

覚八 67 籠のうちにまほうらやまし山がらの身のほどかくすゆふがほのやど

覚八 68 すみなれしふるき宮この恋しさは神もむかしにおもひしるらむ

覚八 69 世のなかのうさには神もなきものをなにのるらん心づくしに

覚八 70 さりともおもふ心もむしのねもよわりはてぬる秋の暮かな

覚八 71 月を見しこぞのこよひの友のみや宮こにわれをおもひいづらむ

覚八 72 恋しとよこぞのこよひの夜もすがらちぎりし人のおもひ出でられて

覚八 73 わけてこし野辺の露ともきえずしておもはぬ里の月を見るかな

覚九 74 けふまでもあればあるかのわが身かは夢のうちにも夢をみるかな

覚九 75 人しれずそなたをしのぶころをばかたぶく月にたぐへてぞやる

覚九 76 もののふのとりつたへたるあづさ弓ひいては人のかへるものかは

覚九 77 行きくれて木の下かげをやどとせば花やこよひのあるじならまし

覚九 78 我がこひはほそ谷河のまろ木ばしふみかへされてぬる袖かな
覚九 79 ただたのめほそ谷河のまろ木橋ふみかへしてはおちざらめやは
覚十 80 いづくともしらぬ逢せのもしほ草かきおく跡をかたみとも見よ
覚十 81 涙河うき名をながす身なりともいまたびの逢せともがな
覚十 82 君ゆゑにわれもうき名をながすともそのみくづともになりなん
覚十 83 逢ふことも露の命ももろともにこよひばかりやかぎりなるらん
覚十 84 かぎりとしてたちわかるれば露の身の君よりさきにきえぬべきかな
覚十 85 旅のそらはにふのこやのいぶせさにふるさといかにこひしかるらん
覚十 86 故郷も恋しくもなしたびの空宮こもつひのすみかならねば
覚十 87 いかにせん宮この春もをしけれどなれし吾妻の花やちるらん
覚十 88 をしからぬ命なれどもけふまでぞつれなきかひのしらねをもみつ
覚十 89 そるまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に入るぞうれしき
覚十 90 そるとてもなにかうらみんあづさ弓ひきとどむべき心ならねば
覚十 91 君すめばこれも雲井の月なれど猶恋しきは都なりけり
覚十一 92 ながむればぬるたもとにやどりけり月よ雲井のものがたりせよ
覚十一 93 雲のうへに見しにかはらぬ月影のすむにつけてもものぞかなしき
覚十一 94 わが身こそあかしの浦に旅ねせめおなじ浪にもやどる月かな
覚十一 95 八雲たつ出雲八へがきつまごめにやへがきつくるその八重がきを
覚十一 96 都をばけふをかぎりの関水に又あふ坂のかげやうつさむ
覚十一 97 せきかねて涙のかかるからころものちのかたみにぬぎぞかへぬる
覚十一 98 ぬぎかふるころもいまはなにかせんけふをかぎりのかたみとおもへば
覚十二 99 かへりこむことはかた田にひくあみの目にもたまらぬわがなみだかな
覚十二 100 郭公花たちばなの香をとめてなくはむかしの人や恋しき
覚十二 101 岩根ふみたれかはとはむならの葉のそよぐはしかのわたるなりけり
覚十二 102 池水にみぎはのさくら散りしきてなみの花こそさかりなりけれ
覚十二 103 おもひきやみ山のおくにすまひして雲ゐの月をよそに見むとは
覚十二 104 このごろはいつならひてかわがころ大みや人のこひしかるらむ
覚十二 105 いにしへも夢になりにし事なれば柴のあみ戸もひさしからじな
覚十二 106 いにしへは月にたとへし君なれどそのひかりなきみ山辺のさと
覚十二 107 いざさらばなみだくらべむ郭公われもうき世にねをのみぞなく

八坂系

- 八九 111 いかばかり君なげくらん心そめし山のもみちを人にをられて
八九 112 何とげに人のをりける紅葉ばに心うつして思ひそめけむ
八十 113 みのならば花も咲きなんくひぜ川わたりてみばや春のけしきを
八十一 115 塩路より絶えず思ひを駿河なる身は浮島に名をばふじの音
八十一 116 われなれや思ひにもゆる富士のねのむなしき空の煙ばかりは

延慶本

- 延七 127 わかでつる道の草葉やかれぬらむあまりこがれて物を思へば
延七 128 おもふには道の草ばもよもかれじなみだの雨のつねにそそけば
延七 沢に生ふる若菜ならねどをのづからとしをつむにも袖はぬれけり
延七 130 一枝ををらずはいかにさくらばなやそちあまりの春にあはまし
延七 132 雲井より吹きくる風のはげしくて涙の露のおちまさるかな
延七 133 むすびつる情もふかきもとみにはちぎる心はほどけもやせむ
延七 134 あづまよりとものおほかせふきくれば西へかたぶく平屋とぞみる
延七 136 としごろのひらやをすててはとのはにうきみをかくすいけるかひなし
延七 138 いかにせむみやぎがはらにつむせりのねのみなけどもしる人のなき
延七 139 かしかましのもせにすだくむしのねやわれだにものはいはでこそ思へ
延七 140 ながれての名だにともまれゆくみづのあはれはかなきみはきえぬとも
延七 142 くれたけのものとのかけひはたえはててながるみづのすゑをしらばや
延七 146 みゆきなるすゑもみやことおもへどもなほなぐさまぬ波の上かな
延七 147 なき人にたむくる花のしたえだをたをればそでのしほれけるかな
延七 150 こぎいでてなみとともにほただよへどよるべきうらのなきぞかなしき
延七 151 いそなつむあまよをしへよいづくをか都のかたにみるめとはいふ
延七 152 西のうみ立つ白波のうへに居てなにすごすらむかりの此の世を
延八 153 名にしおはばいざ事間はむ都鳥我が思ふ人は有りや無しやと
延八 155 よしさらば去年も今年もさかずして花のかはりに我ぞ散りぬる
延八 156 ほどこしむねの乳房を薪にて焼くすみぞめの衣きよきみ
延八 157 君がすむやどのこずゑをゆくゆくと隠るまでにかへりみるかな
延八 159 ゆふぐれは野にも山にもたつ煙思ひよりこそもえはじめけれ
延八 160 東風吹かば句おこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ
延八 162 海ならず湛ふる水の淵までに清き心は月ぞてらさん

延八 163 雨のした乾ける程のなければやきてしぬれぎぬひるよしもなき
延八 164 造るとも又もやけなんすがはらや棟のいたまのあはぬかざりは
延八 168 情なく切る人つらし春くれば主じわすれぬやどのむめがえ
延八 169 これかさはおとにききつる春ごとにあるじを忍ぶやどの梅がえ
延八 170 思出でよなき名のたつはうき事とあら人神となりしむかしを
延八 171 ちはやぶる神にまかせて心みむなき名のたねはおひやいづると
延八 173 千巖破る銚のみさきにかけ給へなき名おほする人の命を
延八 174 いかにして富士の高峰に一夜ねて雲の上なる月をながめん
延八 175 あづさゆみ遂にはづれぬものなれば無き人数にかねて入るかな
延八 176 をれちがふみぎはのあしをくもでてこほりをわたすぬまのうきはし
延八 179 君すめば是も雲居の月なれど猶恋しきはみやこなりけり
延八 180 名にしおふ秋の半ばも過ぎぬべしいつより露の霜に替らむ
延八 181 うちとけてねられざりけり梶枕今宵ぞ月の行へみむとて
延八 183 都なるここのへの内恋しくは柳の御所を春よりてみよ
延八 184 みるたびに心づくしの神なれば宇佐にぞかへすもとの杜へ
延八 185 白さいて赤たなごひに取替へてかしらに巻ける小入道かな
延九 186 とへかしななさは人のためならずうきわれとともこころやはなき
延九 187 宇治川を水つけにしてかきわたる木曾の御れうは九郎判官
延九 188 田畠のつくりものみなかりくひて木曾の御れうはたえはてにけり
延九 189 名にたかき木曾の御れうはこぼれにきよしなかなかに犬にくれなむ
延九 193 こちなくもみゆるものかはさくらがり
延九 193 いけどりとらむためとおもへば
延九 195 ふみかへす谷のうきはしうき代ぞと思知りてもぬるる袖かな
延九 197 谷水の下に流れてまろきばしふみみて後ぞくやしかりける
延十 205 世を厭ひ浄土を傾ふ墨染の有繫がにぬるる袖の上かな
延十 206 恨敷や早晚か忘れむ涙河袖のしがらみ朽ちははつとも
延十 209 恋ひしなば世のはかなきに云ひなして無き跡までも人に知らすな
延十 210 呉竹の本はあふよもしげかりき末こそ節は遠ざかりゆけ
延十 211 つねになき浮世の中にさき初めてとまらぬ花や吾が身なるらむ
延十 212 昔より風に不知灯の光に晴るる長き夜の夢
延十 213 住馴れし都の方は余所ながら袖に波越す磯の松風
延十一 214 今ぞしるみもすそ川の流には浪の下にも都ありとは

延十一 218 名にしおふ明石の浦の月なれど都より猶くもる袖かな
延十一 220 なげきこしみちのつゆにもまさりけりふるさとこふるそでのなみだは
延十一 221 たにふかきいほりは人目ばかりにてげには心のすまぬなりけり
延十一 223 あまたたび行き相坂の関水を今日を限の影ぞかなしき
延十一 224 鏡山いざ立ちよりて見て行かん年経ぬる身は老いやしたると
延十二 228 いふならくならくの底におちぬれば利利も首陀もかはらざりけり
延十二 230 世の中はとてもかくても有りぬべし宮もわら屋もはてしなければ
延十二 234 雲の上に風に楽の音すなり人に問はばや空耳かそも
延十二 235 乾く間もなき墨染の体かなこはたらちめの袖のしづくか
延十二 236 消え方の香の煙のいつまでと立廻るべき此世ならねば
延十二 238 古のならの都の八重ざくら今日九重に移りつるかな
延十二 239 打ちしめり菖蒲ぞ薫る時鳥鳴くや五月の雨の夕晚
延十二 240 久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまされらん
延十二 241 待つ人も今は来らばいかがせむふままく惜き庭のしらゆき
延十二 246 末の露本のしづくや世中の後れ前立つためしなるらむ

長門本

長（十二） 292 いかなれど契りはくちぬ物といへば後の世までもわするべきかは
長（十二） 294 けふも又暮れぬと鐘の声すなり命つきぬとおどろかすかは

盛衰記

盛（七） 151 夏山の出入る月の姿をばいつか雲井に又も見るべき
盛（七） 152 夏山の緑の色はかはるとも出入る月を思ひわするな
盛（八） 166 梅はとび桜は枯れぬ菅原やふかくぞ憑む神の誓を
盛（八） 167 是や此こち吹く風にさそはれてあるじ尋ねし梅のたちえは
盛（八） 169 思ひかね心づくしに祈れどもうさには物もいはれざりけり
盛（九） 179 見る儘に跡絶えぬれば鈴鹿山雪こそ関のとざしなりけれ
盛（九） 180 信濃なる木曾の御料に汁懸けて只一口に九郎義経
盛（九） 182 心あらん人に見せばや津の国の難波渡りの春のけしきを
盛（九） 183 君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住み憂き
盛（九） 184 あしからじとてこそ人は別れしか何か難波の浦は住みうき
盛（九） 187 吹く風を何いとひけん梅の花散りくる時ぞ香はまさりける

- 盛（九） 188 我独りけふの軍に名とり川
盛（九） 188 君もろともににかちわたりせん
盛（九） 189 円子川ければぞ波はあがりける
盛（九） 189 かかりあしくも人やみるらん
盛（九） 190 五月やみくらはし山の杜鵑姿を人にみするものかは
盛（九） 191 都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹くしら川のせき
盛（九） 192 兼てより思ひし事をふし柴のこるばかりなる歎きせんとは
盛（九） 194 吹送る風のたよりに見てしより雲間の月に物思ふかな
盛（十） 207 我が恋は空吹く風にさもにたり傾く月に移ると思へば
盛（十） 208 玉鉾や旅行く道のゆかれぬはうしろにかみの留と思へば
盛（十） 209 山ふかみ思ひ入りぬる柴の戸の真の道に我をみちびけ
盛（十） 213 我がせこがくべき宵なりさがにのくもの振舞兼て知るしも
盛（十） 214 岩田川誓ひの船にさをさしてしづむ吾が身も浮びぬるかな
盛（十） 216 生れては終にしぬてふ事のみぞ定なき世に定ありける
盛（十） 217 故郷にいかにか松風恨むらん沈む我が身の行へしらずは
盛（十） 218 古郷にいかにか松風恨むらん沈む我が身の行へしらずは
盛（十一） 221 時ならぬ花や紅葉をみつるかな芳野初瀬の麓ならねど
盛（十一） 222 扇をば海のみくづとなすの殿弓の上手は与一とぞきく
盛（十一） 225 都にて見しに替らぬ月影の明石の浦に旅ねをぞする
盛（十一） 227 我が思ふ人は波路を隔てつつ心いく度浦づたふらん
盛（十一） 229 かつみれど猶ぞ恋しきわざもこがゆつの爪櫛いかがささまし
盛（十一） 231 猶も又昔をかけて忍べとやふりにし軒にかをるたち花
盛（十一） 232 是や此ゆくも帰るも別れてはしるもしらぬも逢坂の関
盛（十一） 235 ちはやぶる三上の山の榊葉は昌えぞまさる末のよまでも
盛（十一） 239 もろともに思合はせてしぼるらし東路にたつころもばかりぞ
盛（十一） 240 東路に思ひ立ちぬる旅ごろも涙に袖はかわくまぞなき
盛（十一） 241 みとせへし心尽しの旅ねにも東路ばかり袖はぬらさじ
盛（十一） 242 天くだるあら人神の神ならば雨下り給へ天くだる神
盛（十一） 244 憑みおく契はくちぬ物といへば後の世までも忘るべきかは
盛（十一） 245 思ふ事かたりあはせん郭公げに嬉しくも西へ行くかな
盛（十二） 247 白波の打驚かす岩の上にねいらで松の幾世経ぬらん
盛（十二） 248 みちのくの里は遥かに遠くとも書尽してぞつぼの石ぶみ

盛（十二） 249 つらからば我もろともにさもあらでなど浮人の恋しかるらん
盛（十二） 250 思ふより友をうしなふ源の家にはあるじ有るべくもなし
盛（十二） 251 義経はさてもとみつる世中にいづくへつれて行家をさは
盛（十二） 252 消えずとて憑む命にあらねども今朝迄露の身ぞ残りける
盛（十二） 254 猶も又昔をかけて忍べとや古りにし軒にかをるたち花
盛（十二） 255 奥山に紅葉ふみ分け啼く鹿のこゑ聞く時ぞ秋は悲しき
盛（十二） 266 さしもまた問はれぬ宿と知りながらふまでぞ惜き庭の白雪
盛（十二） 267 世中はとても角ても有りぬべし宮もわらやも果てしなければ
盛（十二） 269 いにしへは月にたとへし君なれど光失なふ深山べの里
盛（十二） 270 よしさらば真の道のしるべして我をいざなへゆらく玉の緒
盛（十二） 271 誰が世にか種は蒔きしと人間はばいかが岩根の松は答へん

四部本

四七 難波方境遙かに浪越えて憂き名を流す須磨の浦かな
四九 合はん事は何を渚の浜千鳥波の立居に音をのみぞ泣く
四九 身は此に心は其れに在明けの尽きぬ思ひを我如何にせん
四九 嵐吹く駒が林を今朝見ればまだ古葉にて替はら去りけり
四九 人故に流す涙ぞ露けいて袖も袂も朽ちぬべきかな
四九 問へかしな別れの袖は波の上枕も寝も浮きぬ計りに
四九 外に思ふ歎きならねば誰にかは身より外には問ふべかるらん
四十二 皆人は花の袂に成りにけり苔の衫は乾きだにせよ
四十二 夢ならで又も相ふべき君ならばねられぬいをも歎かざらま
し
四十二 夢見ずと歎きし君は程も無く又我が夢に看るぞ悲しき
四十二 諸共に苔の下には朽ちずして埋まれぬ名を聞くぞ悲しき
四十二 思ひ知る人も在るなり世の中にいつをいつとて急がざるらん
四十二 飯る日をいつまで草のいつまでかいつまで家のあらんとはせん
四十二 世の中を何に譬へん秋の田のほのかに照らす宵の電
四十二 此の代こそ思ひ知りぬれ桜花さくかとすれば根に返りつつ
四十二 露の命草葉にこそは懸かれども月の鼠の騒ぎなるかな
四十二 時雨こそ千草の花は散りまがふ何古に袖濡らすらん

闘諍録

闘八上 都にてながめし月のもろともに旅の空にも出でにけるかな

闘八下 ことわりやくもればこそはます鏡うつりし影もみえずなるらめ

南都本

南八 ながらへて浮世の中にあらばこそ雲井の月を夜な夜なも見め

南八 かしわ木の森の梢ぞさかふなる葉もりの神の恵みなるべし

南九 きのふまでかからざりしをあすか河いかに湊瀬に替り行覧

南九 湊瀬とはあながちいひそさざれ石の岩尾とならん御代にやはあらぬ

南異十 さらぬだにをぼろ月夜は物憂にいとど涙を増鏡哉

南異十 滝津瀬早く流るる水よりも留め難きは命成けり

南異十 唐人の袖振事は多けれど立居につけて哀れとはみよ

(たかはし・あきこ／本学大学院博士後期課程満期退学)

(たかむら・けいこ／本学大学院博士後期課程)

(たむら・むつみ／本学大学院博士後期課程満期退学)

巻七

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異	四
覚七56	千はやぶる	屋抜	八七				盛二八142	南七		
				延七127	わかでつる	巻十三				
				延七128	おもふこは	巻十三				
				延七	沢に生ふる		盛三〇143			
				延七130	一枝を	巻十四	盛三〇144			
覚七57	たいらかに		八七	延七131						
				延七132	雲井より	巻十四	盛三一145			
				延七133	むすびつる	巻十四	盛三一146			
								南八		
				延七134	あづまより	巻十四				
覚七58	いかにせん		八七	延七135				南八		
				延七136	としごろの		盛三一155			
覚七59	さざなみや	屋七	八七	延七137		巻十四	盛三二159	南八		欠
				延七138	いかにせむ	巻十四				
				延七139	かしかまし	巻十一	盛三二160	南八		
				延七140	ながれての	巻十四	盛三二161	南八		
覚七60	あかずして		八七	延七143		巻十四				
覚七61	くれたけの		八七	延七141		巻十四	盛三一149	南八		

関	初句〈他〉	詠者	出典	備考
		経正		
		〈延〉義基〈長〉義隆		〈長〉(1)「はやきつる」
		重氏		〈長〉(1)「思ひには」
		〈延〉小町〈盛〉俊成	詠藻・106、玄玉・479、新古今・15・藤原俊成	〈延〉(3)「をのづから」〈盛〉「徒に」/〈延〉国歌大観では欠番
		〈盛〉此国の歌人		全体に小異
		山王大師		八坂系は中院のみ/延(1)「たへらかに」(4)(5)「かたぶくつきとなるぞはかなき」
		維盛北方		〈盛〉(5)「おきまさるかな」
		維盛北方		〈盛〉(1)「むすびてし」/〈長〉(5)「ほどけもやせし」
	ながらへて	維盛北方		
		落首		〈長〉(5)「日にやあるらん」
		春日大明神		八坂系は中院のみ/〈南〉(5)「任ても見よ」 〈覚〉「まかせてやみん」
		落首		
		忠度	千載・66・詠み人知らず、忠度集、その他	右衛門督家歌合「さざ波や志賀の都は荒れにしをまたすむ物は秋の夜の月」
		忠度	千載・668・詠み人知らず	〈延〉(2)「みやぎがはらに」千載(2)「みかきがはらに」
			十訓抄、今物語、著聞集、新撰朗詠集・313	〈覚〉巻五、〈長〉巻十一で一部抜粋/〈長〉(3)「虫のねに」〈盛〉〈南〉「虫のねよ」
		行盛	新勅撰・1194・平行盛	〈長〉(1)「ながれ名の」(3)「水茎の」/〈盛〉全体的に小異
		仁和寺の御室	古今・400・詠み人知らず	古今「あかずして別る袖の白玉を君がかたみとつつみてぞゆく」他諸本で小異
		経正		全体に小異

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異	四部
				延七142	くれたけの		盛三一150	南八		
							盛三一151			
							盛三一152			
覚七62	あはれなり		八七	延七144		卷十四	盛三一153	南八		
覚七63	旅ごろも		八七	延七145		卷十四	盛三一154	南八		
		屋七	八七	延七146	みゆきなる	卷十四	盛三二163	南八		
				延七147	なき人に		盛三二162	南八		欠
覚七64	はかなしな	屋七	八七	延七148		卷十四	盛三二157	南八		欠
覚七65	ふるさとを	屋七	八七	延七149		卷十四	盛三二156	南八		四七
								南八		
				延七150	こぎいでて	卷十四				
				延七151	いそなつむ	卷十四				
				延七152	西のうみ					
										四七

闘	初句〈他〉	詠者	出典	備考
		仁和寺の御室		
	夏山の	大蔵卿法印		
	夏山の	経正		
		〈覚〉〈八〉法印／〈延〉〈盛〉行 経		〈延〉〈長〉(1)「みなちりぬ」／〈南〉(1)「身のなれる」／〈延〉〈盛〉(5)「花も残らじ」他小異
		経正		〈南〉(4)「思とほくも」／〈中〉(5)「とをくゆくなり」
		経正		〈延〉以外(1)「みゆきする」長(2)「すえもみやこは」
		忠度		盛(3)(4)「下枝はたをれる袖の」
		〈覚〉教盛／〈延〉〈長〉〈屋〉 〈八〉忠度／〈盛〉〈南〉経盛		〈長〉〈南〉〈屋〉〈中〉(1)「はかなしや」他小異
		〈盛〉〈南〉忠度／〈延〉行盛 〈長〉〈四〉〈屋〉〈覚〉〈中〉経盛		
	かしわ木の	或人		
		時忠		〈延〉(5)「なきぞかなしき」〈長〉「なき我身かな」
		時忠北方		〈延〉(4)「都のかたに」〈長〉「都のかたを」
		宇佐八幡	新古今・1864	〈延〉(3)「うへに居て」新古今「上にして」
	難波方	有る人		

巻八

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異	四部
覚八66	一声は									
	ほととぎす		八八							
覚八67	籠のうちも		八八							
								南九		
								南九		
				延八153	名にしおはば					
覚八68	すみなれし	屋八	八八	延八154		長十五	盛三二164	南九		
				延八155	よしさらば					
				延八156	ほどこし					
				延八157	君がすむ					
				延八159	ゆふぐれは					
				延八160	東風吹かば		盛三二165			
							盛三二166			
							盛三二167			
				延八162	海ならず					
				延八163	雨のした					
				延八164	造るとも					
				延八168	情なく					
				延八169	これかさば					
				延八170	思出でよ					
				延八171	ちはやぶる					
							盛三三169			
				延十213	すみなれし	長十七	①	南八		
覚八69	世のなかの	屋八	八八	延八172			盛三三170	南八		
覚八70	さりととも		八八	延八182		長十五	盛三三171	南八		
				延八173	千巖破る	長十五				
				延八174	いかにして					
				延八175	あづさゆみ					

闘	初句(他)	詠者	出典	備考
		落書(範光)	新古今・207・民部卿範光	小異あり
		範光		八坂系は中院本のみ
		落書(範光)	玉葉集・寂蓮	八坂系は中院本のみ
	昨日まで	落書		
	瀬瀨とは	落書		
		業平	a	
闘八上		A	玉葉集・1179・重衡	1
		道真	聖廟御詠、菅家御集	2
		道真母	b	3
		道真	c	4
		道真	大鏡、北野天神縁起他	5
		道真	d	〈延〉(5)「春なわすれそ」〈盛〉「春を忘るな」
	梅はとび	源順		
	是や此	童子		
		道真	e	6
		道真	f	拾遺集(2)「のがる人の」他小異
		虫食い文字	大鏡、北野天神縁起他	大鏡(5)「あはぬかぎりは」他小異
		御声	g	7
		珍光		
		或女	縁起は諸本で小異	8
		大納言禪師	縁起、続詞花、袋草紙、十訓抄	9
	思ひかね	宗盛		
		B		10
闘八上		宇佐宮	h	(4)(5)に小異
		宗盛	i	
		女		
		女		11
		真如(女)	j	12

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異	四
				延八176	をれちがふ					
覚八71	月を見し	屋八	八八	延八177		長十五	盛三三173	南九		
覚八72	恋しとよ		八八	延八178		長十五	盛三三174	南九		
覚八73	わけてこし									
		屋八	八八	延八179	君すめば	長十五	②	南九		
				延八180	名にしをふ	長十五	盛三三176	南九		
				延八181	うちとけて	長十五	盛三三177	南九		
				延八183	都なる	長十五	盛三三168	南九		
			八八	延八184	みるたびに		盛三三172	南九		
				延八185	白さいて	長十五	盛三三178	南九		

①盛三二158・盛四一220

②盛三三175・盛四一219

A重衡／〈延〉〈長〉〈南〉経盛／〈盛〉〈闘〉経正

B〈盛〉〈南〉女房／〈延〉〈長〉〈盛〉知盛

C時忠／〈屋〉〈中〉行盛

a伊勢物語、古今・411・在原業平他

b拾遺・1294、拾遺抄559、俊頼髄脳

c拾遺・351・菅原道真、大鏡、宝物集他

d拾遺1006・菅原道真、大鏡、北野天神縁起他

e新古今・1699・菅原道真、大鏡、北野天神縁起他

f拾遺・1216・菅原道真、大鏡、北野天神縁起他

g新古今・1853・つくしへまかりけるもの、北野天神縁起他

h八幡愚童訓乙本他では別の説話として載る

i千載・333・藤原俊成、長秋詠藻・533、歌仙落書22、それぞれ小異

j三国伝記、法華経直談鈔、金刀本保元、京図本保元他

k詞花・387・道命法師

關	初句(他)	出典	詠者	備考
		真如(女)		伊勢物語の東下りを意識?
關八上		忠度		(2)「去年ノ今宵」は菅家後集「九月十日」によるか
關八上	都にて	経盛	k	
關八上		経盛		13
		経正	月詣・経正	月詣(1)「わきてこし」
關八上		C		〈屋〉(3)「月ナレハ」/〈盛〉重出→巻十を見よ
		行盛		〈長〉(3)「過ぬ也」〈盛〉「過ヌヘシ」〈南〉「過ニケリ」
		宗盛		〈南〉(1)「思ひつつ」、〈長〉〈盛〉〈南〉(4)(5)で小異あり
		忠度		〈南〉(4)「柳ノ園ヲ」〈盛〉(5)「立ヨリテ見ヨ」。
		女		14
關八上		奈良法師		15

1玉葉集(4)(5)「神も昔に思ひ知るらむ」他諸本で小異

2聖廟御詠「よしさらば年の三とせはさかずして花のかはりに我ぞたちぬる」菅家御集「よし桜年の三とせはさかずして花のかはりに我ぞ待ぬる」

3拾遺「人なしし胸の乳房をほむらにて焼く墨染の衣着よ君」

4拾遺(2)「やどのこずゑの」(5)「かへりみしはや」他諸資料で小異

5大鏡・縁起(1)「タされば」(4)(5)「なげきよりこそもへまさりける」

6大鏡他諸資料で小異/〈延〉は(2)「湛」を「堪」と誤記

7縁起(宝治本)「ナサケナクナル人ツラシ我ヤトノアルシワスレヌメノタチエヲ」。新古今・沙石集も同。

8道真仮託歌集「おもひきやなき名たつ身はうかりきとあら人神となりし昔を」

9続詞花「千早振神に任せてこゝろみむたねもなき名はおふやおひすや」

10〈南〉(2)「都の方を」(5)「ういの松風」/〈盛〉重出→巻十を見よ

11〈盛〉ハ46「思ひきや富士の高ねに一夜ねて雲の上なる月をみるとは」

12三国伝記「梓弓ハヅルベシトハ思ハネバ無キ人数ニカネテ入カナ」法華経直談鈔「梓弓ハヅルベシトモ思ハネバ兼テ無キ身ノ数ニ入ル哉」月刈藻集「アツサ弓ハヅルベキトモ思ハネバ兼テ無名ノ数ニ入ル哉」金刀本保元「あづさゆみはづるべしともおもはぬはなき人かずにかねているかな」など小異

13〈南〉(2)「コソノ今夜ノ」/〈關〉(4)「契事」〈覺〉〈中〉「ちぎりし人の」〈盛〉「月見る友の」

14〈盛〉(1)「見からに」、能『清経』御伽草子『さいき』『月庵醉醒記』で小異

15〈長〉〈盛〉〈南〉「白」→「赤」、「赤」→「白」〈盛〉(4)「頭にしまく」

巻九

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異	四部
				延九186	とへかしな					
				延九187	宇治川を	長十六				
				延九188	田畠の	長十六				
				延九189	名にたかき	長十六				
							盛三五179			
							盛三五180			四九
巻九74	けふまでも		八九	延九190			盛三六181			
							盛三六182			
							盛三六183			
							盛三六184			
										四九
										四九
巻九75	人しれず		八九	延九191		長十六	盛三六185	南十		四九
										四九
巻九76	もののふの		八九	延九192			盛三七186	南十		四九
				延九193	こちなくも	長十六				
							盛三七187			
							盛三七188			
							盛三七189			
							盛三七190			
							盛三七191			

闘	初句〈他〉	詠者	出典	備考
		西行	続古今・1338・西行、山家・1285	山家(3)「みのためを」
		いかなる者か		〈長〉(4)「木曾のござうを」
		いかなる者か		〈長〉(3)「かりめして」
		いかなる者か		
	見る儘に	古歌		
	信濃なる	何者が所為		〈四〉(1)「信濃なれ」
		教盛	千載・533・慈円の改作か	〈延〉〈盛〉(2)〈3〉「あればあるとやおもふらむ」
	心あらん	能因	後拾遺・43・能因、能因集・85	
	君なくて	男	大和物語・249	
	あしからじ	女	大和物語・250	
	合はん事は	維盛		
	身は此に	維盛北方		
		承仁法親王	新古今・1785・承仁法親王	
	嵐吹く	景高		
闘八下		景高〈闘〉景季		〈延〉〈四〉〈南〉(1)「むかしより」/〈延〉(4)「ひかでは人の」/〈盛〉〈四〉〈闘〉「引きては人の」他諸本で小異
闘八下		重 衡 ・ 景 季 〈闘〉景時		〈長〉(2)「見ゆる物かな」/〈闘〉(1)(2)(3)「もののふの桜狩りこそよしなけれ」
	吹く風を	凡河内躬恒	拾遺・30・凡河内躬恒	
	我独り	頼朝・景時		
	円子川	景時・頼朝		
	五月やみ	守長	拾遺・124・藤原実方、実方集・189	実方集(4)(5)「おぼつかなくもなきわたるかな」
	都をば	能因入道	後拾遺・518・能因	

覚一本	初句〈覚〉	屋	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	南異	四部
							盛三七192			
巻九77	行きくれて		八九			長十六	盛三七193	南十		
							盛三八194			
										四九
巻九78	我がこひは		八九	延九194			盛三八195	南十	南異十	四九
				延九195	ふみかへす	長十六	盛三八196			
巻九79	ただたのため		八九	延九196			盛三八197	南十	南異十	四九
				延九197	谷水の	長十六	盛三八198			
				延十210	呉竹の		盛三八199			
									南異十	
										欠
			八九111							
			八九112							
										四九
										四九

闘	初句〈他〉	詠者	出典	備考
	兼てより	加賀〈待賢門院女房〉	千載・799・待賢門院加賀	
		忠教		
	吹送る	通盛		
	人故に	教盛娘		
		通盛		〈盛〉(5)「ぬるる袖かな」〈南〉「袖そぬれける」〈南異〉「袖ぬらす哉」
		通盛		〈延〉〈長〉(4)「思知りても」〈盛〉「思ひしよりも」
		上西門院		〈延〉(5)「落ちざらむやは」〈盛〉「落つる習ぞ」〈南異〉「落る習」〈四〉「落ちぬ物河」
		上西門院		
		小宰相〈延〉永観律師		〈延〉(3)「しげかりき」〈盛〉「近かりき」／〈延〉(5)「遠ざかりゆけ」〈盛〉「遠ざかりけれ」→巻十を見よ
	さらぬだに	小宰相		
闘八下	ことわりや	小宰相	金葉・579・藤原実信母	
	いかばかり	資盛の北の方		八坂系は国民文庫本のみ
	何とげに	資盛の北の方		八坂系は国民文庫本のみ
	問へかしな	教盛		
	外に思ふ	宗盛		

巻十

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異	四
覚十80	いづくとも	屋十	八十	延九198		長十六	盛三九206	南十一		
覚十81	涙河	屋十	八十	延十199		長十七	盛三九200	南十一	異十	欠
覚十82	君ゆゑに	屋十	八十	延十200		長十七	盛三九201	南十一	異十	欠
覚十83	逢ふことも	屋十	八十	延十201		長十七	盛三九202	南十一	異十	欠
覚十84	かぎりとして	屋十	八十	延十202		長十七	盛三九203	南十一	異十	欠
			八十113					南十一		
覚十85	旅のそら	屋十	八十	延十203		長十八	盛四五237	南十一		欠
覚十86	故郷も	屋十	八十	延十204		長十八	盛四五238	南十一		欠
覚十87	いかいせん		八十					南十一		欠
覚十88	をしからぬ	屋十	八十					南十一		
							盛三九207			
							盛三九208			
							盛三九209			
				延十205	世を厭ひ					
				延十206	恨敷や					

闘	初句〈他〉	詠者	出典	備考
		維盛		〈盛〉(1)「折折は」/〈延〉(2)「しらぬなぎさの」、〈盛〉(2)「しらぬ浦路の」、〈屋〉〈覚〉〈中〉(2)「知ぬあふ瀬の」
闘八		重衡	異本伊勢物語40、業平33	〈延〉〈盛〉〈屋〉(4)「今一しほの」、〈長〉〈南異〉〈覚〉〈中〉「今一たひの」
闘八		内裏女房		〈屋〉(1)「涙河」/〈延〉〈盛〉(5)「共にならばや」、〈長〉〈南異〉〈屋〉〈覚〉「共に成なん」、〈中〉「ともにきえなん」
闘八		重衡		〈長〉〈闘〉〈南異〉(4)(5)「今夜はかりとおもふかなしさ」
闘八		内裏女房		〈屋〉(1)(2)「合事の限と聞けば」、〈南〉〈中〉「合事も限りときけば」(傍書「カギリトテ立ワカレナバ」)
	みのならば	重衡		
闘八		侍従		〈延〉〈ハ〉(1)「東路や」、〈長〉〈盛〉「東路の」、〈屋〉〈覚〉「旅の空は」〈長〉(3)「さびしさに」→巻十一を見よ
闘八		重衡/宗盛		〈延〉〈ハ〉(4)「いづくも終の」、〈盛〉〈屋〉〈覚〉「都もつひの」→巻十一を見よ
闘八		侍従		
		重衡	海道記	〈屋〉(3)「今日までに」、〈中〉「けふあれは」
	我が恋は	重景		
	玉銚や	石童丸		
	山ふかみ	横笛		
		古歌		
		横笛		

覚一本	初句〈覚〉	屋代	八坂	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	南異	四
覚十89	そるまでは	屋十	八十	延十207		長十七	盛四〇210	南十一		欠
覚十90	そるとても	屋十	八十	延十208			盛四〇211	南十一		
				延十209	恋ひしなば					
							盛四〇213			
							盛四〇214			
				延十210	呉竹の		盛三八199			
				延十211	つねになき					
				延十212	昔より					
									南異十	
									南異十	
							盛四〇216			
			八十				盛四〇217・ 四一218			
覚十91	君すめば	屋八	八八	延八179		長十六	盛三三175・ 盛四一219	南九・ 南十一		欠
				延十213	住馴れし	長十七	盛三二158・ 四一220	南八	南異十	

闘	初句〈他〉	詠者	出典	備考
		：〈延〉横笛 〈長〉〈盛〉〈屋〉 〈覚〉〈中〉滝口		〈長〉(1)(2)「そるまでも頼しものを」、盛「白 真弓そるを恨と思ひしにまことの道に入るぞ うれしき」
		〈延〉滝口 〈盛〉〈屋〉〈覚〉 〈中〉横笛		※盛「白真弓そるを恨と思ひしにまことの道 に入るぞうれしき」
		横笛	千載・666・頼輔	
	我がせこが	衣通姫		
	岩田川	維盛		
		永観律師〈盛〉 小宰相局		〈延〉(3)「しげかりき」〈盛〉「近かりき」、〈延〉 (5)「遠ざかりゆけ」〈盛〉「遠ざかりけれ」→ 巻九を見よ
		維盛		
		花山院		
	滝津瀬	重衡		
	唐人の	藤壺女御		
	生れては	維盛		
	故郷に	維盛		〈盛〉重出
闘八		〈延〉〈長〉〈盛〉 〈闘〉〈南〉時忠 ／〈盛〉〈南〉 〈屋〉〈覚〉〈中〉 行盛	千載・1290・左馬頭行盛	〈盛〉〈南〉重出→巻八を見よ
		〈延〉〈長〉〈盛〉 知盛／〈盛〉或 旧女〈南〉或る 女房		〈盛〉重出→巻八を見よ

卷十一

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異
							盛四二221		
							盛四二222		
				延十一214	今ぞしる	長十八	盛四三223		
覚十一92	ながむれば	屋十一	八十一	延十一215		長十八	盛四三226	南十二	
覚十一93	雲のうへに			延十一216		長十八	盛四三224	南十二	
覚十一94	わが身こそ			延十一217		長十八		南十二	
							盛四三225		
							盛四三227		
				延十一218	名に _レ おふ	長十八	盛四三228		
覚十一95	八雲たつ		八十一	延十一219		長十八		南十二	
							盛四四229		
				延十一220	なげきこし				
				延十一221	たごふかき				
覚十二100	郭公	屋十一	八十一	延十一222		長十八	盛四四230	南十二	
							盛四四231		
覚十一96	都をば								
		屋十二	八十一115					南十二	
		屋十二	八十一116					南十二	
							盛四五232		
				延十二230	世中は	長二十	盛四五233		
				延十一223	あまたたび	長十八	盛四五234		
							盛四五235		

四部	關	初句〈他〉	詠者	出典	備考
		時ならぬ	玉虫		
		扇をば	近き代の人		
欠			二位尼		
欠			帥典侍		
			帥典侍		
			大納言典侍		〈延〉〈南〉(1)我らこそ
		都にて	義経		
		我が思ふ	時忠		
			道真		
			素戔鳴尊		国民文庫本は末尾の「大秘事」に記す
		かつみれど	今世の人	新勅撰・基俊	
			王昭君	後拾遺・1016・赤染衛門、 赤染衛門集	
			建礼門院		
四十一			古歌	新古今・244・詠み人知ら ず	〈盛〉巻四八253〈長〉巻二十重出→巻 十二を見よ
		猶も又	大納言典侍		〈盛〉重出、巻四八254→巻十二を見よ
			宗盛		
		塩路より	宗盛		
		われなれや	清宗		
		是や此	蟬丸		
			蟬丸		〈盛〉重出、巻四八267→巻十二を見よ
			東三条院		
		ちはやぶる	能宣		

覚一本	初句〈覚〉	屋代本	八坂系	延慶本	初句〈延〉	長門本	盛衰記	南都	異
				延十一224	鏡山	長十八	盛四五236		
							盛四五237		
							盛四五238		
							盛四五239		
							盛四五240		
							盛四五241		
							盛四五242		
覚十一97	せきかねて	屋十二	八十二					南十二	
覚十一98	ぬぎかふる	屋十二	八十二	延十一225		長十八	盛四五243	南十二	
						長十八292			
							盛四五244		
							盛四五245		

四	關	初句〈他〉	詠者	出典	備考
			〈延〉ナ七ノ翁(七翁の誤 写か)／〈長〉奈良の叟／ 〈盛〉七翁	古今・899・黒主(左注) ／東関紀行	〈長〉のみ巻七(巻三相当)「太 政大臣師長趣配所給事」に重 出(詠者は黒主)／〈長〉巻七のみ 歌として掲載。他本は〈延〉「老 やしぬる」などと引歌の扱い
		東路の	侍従		〈延〉〈關〉〈南〉〈屋〉〈覚〉〈八〉は 先出→巻十を見よ
		故郷も	宗盛		〈延〉〈關〉〈南〉〈屋〉〈覚〉〈八〉は 先出→巻十を見よ
		もろともに	湯谷		
		東路に	宗盛		
		みとせへし	清宗		
		天くだる	能因		
			重衡		〈屋〉(1)せきあへぬ〈南〉せきや らぬ〈中〉せきあへず
			大納言典侍／〈延〉〈長〉 〈盛〉重衡		
		いかなれど	大納言典侍		
		憑みおく	大納言典侍		
		思ふ事	重衡		

卷十二

覚一本	初句(覚)	屋代本	八坂系	延慶本	初句(延)	長門本	盛衰記	南都	異
覚十二99	かへりこむ	屋十二	八十二	延十二226		長十九	盛四六246	南十二	
		屋十二	八十二				盛四六247		
							盛四六248		
覚十二101	岩根ふみ	屋十二	八十二	延十二227		長二十	盛四八256	南十二	
							盛四六249		
							盛四六250		
							盛四六251		
							盛四七252		
覚十二100	郭公	屋十一	八十一	延十一222		長十八・二十	盛四四230 ・四八253	南十二	
							盛四四231 ・四八254		
						長二十294			
							盛四八255		
				延十二228	いふならく		盛八42		
覚十二102	池水に		八十二	延十二229		長二十	盛四八257	南十二	
				延十二230	世の中は	長二十	盛四五233 ・四八267		
				延十二234	雲の上に		盛四八259		
				延十二235	乾く間も	長二十	盛四八260		

四部	調	初句(他)	詠者	出典	備考
			時忠		〈盛〉(4)「めにあまりたる」
		白波の	時忠		
		みちのくの	二位殿		
			建礼門院/〈屋〉 〈中〉大納言局		〈延〉〈盛〉(1)「里とほみ」/国歌大観 〈盛〉「岩根ふみ」→〈盛〉「里とをみ」
		つらからば	義経の女房(時 忠の娘)		
		思ふより	義経		国歌大観〈盛〉(1)「思ふより」→〈盛〉「思 ひより」
		義経は	落首		
		消えずとて	六代御前		
四十二			古歌	新古今・244・詠み人 知らず	〈長〉〈盛〉重出→巻十一を見よ
		猶も又	大納言典侍		〈盛〉重出→巻十一を見よ
		けふも又	建礼門院		
		奥山に	古歌	古今・215・詠み人知 らず	〈盛〉重出
			延喜の聖主(醍 醐天皇)		〈盛〉(3)「入りぬれば」
			後白河法皇	千載・78・院御製	〈延〉〈盛〉(2)「岸ノ青柳」、〈長〉〈覚〉 〈中〉(2)「みきはの桜」
			蟬丸	新古今・1851・蟬丸	〈盛〉重出→巻十一を見よ
四十二			建礼門院		〈延〉(2)「風に楽の」〈盛〉「ほのかに楽 の」〈四〉「遙かに楽の」/〈盛〉(5)「そら 聞きかぞも」
			建礼門院		〈延〉(3)「躰かな」、〈盛〉〈長〉「袂かな」

四部	調	初句〈他〉	詠者	出典	備考
			建礼門院	夫木・7969・寂蓮	〈延〉(5)「此世ならねば」、〈盛〉「この世なるらん」
四十二			建礼門院		
			古歌	詞花・29・伊勢大輔	〈盛〉(5)「香ひぬるかな」
			古歌	新古今・220・藤原良経	
			古歌	古今・194・壬生忠岑	
		さしもまた	古歌		
			古歌	詞花・158・和泉式部	
			建礼門院	続古今・1550・雅成親王	A
		よしさらば	京極御息所		
四十二		誰が世にか	光源氏		B
			菅原道真		〈延〉重出一巻八を見よ、〈延〉(5)「春なわすれそ」〈盛〉「春を忘るな」
四十二		皆人は	宗貞少将	古今・847・遍昭	
四十二		夢ならで	藤原相如		
四十二		夢見ずと	藤原相如娘	後拾遺・565・相如女	
四十二		諸共に	和泉式部	金葉・620・和泉式部	
四十二		思ひ知る	藤原公任	拾遺・1335・藤原公任	
四十二		飯る日を			
四十二		世の中を	古歌	後拾遺・1013・源順	
四十二		此の世こそ	花藏院法印		
四十二		露の命	花藏院法印		
四十二		時雨こそ	賀縁阿闍梨	後拾遺・599・賀縁法師	
			良僧正	和漢朗詠集・798・良僧正	
			建礼門院		
			建礼門院		
四十二			藤原実定		〈盛〉(3)(4)「君なれど光矢なふ」、〈四〉「君なれば其の光無き」

B〈盛〉(4)(5)「いかが岩根の松は答へん」、〈四〉「岩根の松は何か答へん」